

小浜島の風水について

友野 林太郎

～「風水」って何だろう？～

1. 「風水」という考え方

近年、様々なところで注目を集めている「風水」。住宅・墓を建てる時の風水判断、風水をもとにした占い、風水による環境・都市計画・・・今や洋の東西を問わず、ブームとなり、重宝がられているこの「風水」とは一体何なのだろうか。

風水を理解するには、まず東洋独自の自然観を知る必要がある。

・風水は別名「地理」ともいう。西洋でいう「地理」とは「止まっている」、「人と切り離れた」自然が対象であり、そこでは「自然」と「文化」は相反する存在なのである。

・対して東洋では、自然というものを「生きている」、「人の働きかけに応じる」ものと捉える。「気」というエネルギーによって自然も、自然の一部である人間も、同じように生かされているとする考え方をする。

・「気」のエネルギーは、発生・消滅したり、流れたり、溜まったりするものであると考えられている。そうした気の流れを読みとって、自然に人間から作用を加えることで、気の流れに乗じたような生活空間を構築すれば、自分の生活や子孫にも好影響をもたらすとされる。そして、そうした環境や造営物までを整えるための、東アジア独特の方法論を「風水」と呼ぶのである。

・「気」は宋山(そうざん)の山頂、すなわち「龍源」に発し、山並や河などの「龍脈」を伝って平地におりてくる。山からおりてきた気は「穴(ケツ)」と呼ばれる窪みに溜まり、また穏やかに流れ出す。風水を判断する専門家、風水師の主な仕事は、この「穴」にあたる土地を探し、「龍脈」を見つけだすことである。

渡邊欣雄「風水 気の景観地理学」目崎茂和「図説 風水学」より

・風水師の土地判断基準は「1、山 2、水 3、方位」。つまり重要なのは山水と方位である。「背山面水」といって、三方を山に囲まれ、水に面した土地がよい。詳細は下の図に詳しい。



理想の風水地形 【目崎茂和 1998 『図説 風水学』 P34, 35を参照】

- ・「宋山 = 玄武」集落の北側に位置する宋山。冬には北西から吹く厳しい季節風を防ぐ。
- ・「白虎 ~ 青龍」集落の北側を西から東へ逆U字に取り囲む山脈は、外敵の侵入を防ぎ、食料の調達も容易。
- ・「穴」盆地状の地形の小丘。陰宅(墓)は此所に造るべし、とされる。
- ・「明堂」「穴」にあたる小丘の前に広がる台地。陽宅(家屋)はここに造る。背後が高く、前に下がる地形(= 晋土)が良いとされる。
- ・風水看にはこのように地形を見る事を重視する「形勢学派」と方位を重視する学派とがある。琉球時代は前者が盛んであったが、現代の沖縄の風水は主に方位を重視する傾向にある。

目崎茂和 「図説 風水学」より

2. 風水はいつごろ起こった？

起源は中国。紀元前からの中国文明のなかで、その土地での自然・環境観や、それと対応した生活術の経験則を時代とともに蓄積・体系化したのがそもそもの始まり。最も古くは「青烏(せい)術」、「青烏(せいちょう)術」と称され、紀元前の漢では「青烏子」が地理・暦を司り、「相地骨経」「葬経」など最古の風水文献を著した。

風水の語源

- ・ 自然を三元論的にとらえた場合の「風、水、土」のうち、絶えず動いて気を運び出すのが「風」と「水」であることから。
- ・ また、「風」と「水」という地上の可視的現象を観察することで、不可視の天然自然の原理を探る方法論であることから。
- ・ 風水を俗に「蔵風得水」という。良い風をたくわえ、よい水を得る。つまり、気持ちの良い自然を生活の中に取り入れるということだ。

渡邊欣雄「風水 気の景観地理学」

何 曉昕「風水探源」より

3. 沖縄の風水

沖縄は、日本で唯一の正統派の風水が伝わった地域といわれている。沖縄の風水の歴史は、中国との公的交流が始まった時期の渡来人、閩人(ピンジン)三十六姓が福健省から風水の知識を持ち込んだことにその始まりをみる。その後、沖縄風水の中興の祖といわれるジッカ・パッカ(本名 楊明州 浙江省出身 1629年、航海中台風によって遭難し、石垣島に漂着した。しばし川平村に住み風水を看たが、1648年、琉球王府は久米村の子弟教育のため彼を登用した。琉球最初の風水師といわれる周国俊は彼の弟子の一人。)などの活躍もあり、風水は琉球王府の官吏の必修科目として学ばれるようになる。留学生たちはこぞって風水の中心地である福健省に赴いて学び、その知識を琉球に持ち帰った。名宰相として名高い蔡温(さいおん)もそうした留学生の一人で、彼は風水に基づいて集落の移動や河川の工事などの政策を打ち立てた。

蔡温の風水政策

1732. 国民の自由な農地開墾、自由な移住を禁じた。

1737. 「地割制」導入。風水による国造りを開始。


- ・ 本島・八重山諸島の村落を風水に基づき移動。当時新しい村をつくる時は地理・地勢全てを風水師が検討した上で行われた。首里王府の正史「球陽」に詳しい。
- ・ 河川改修・本島北部の羽地大川の大改修や、気をためる溜め池や遊水池。
- ・ 林業政策・「蔡温松」・・・海沿いに植えられた松やアダンの並木。

村の周囲の「抱護林」、海岸の「防風林」、森林保護・管理の為の「風水山」(主に御嶽)など。林業についての政策書『林政八書』を著す。

風水が民間に広まったのは1879年の琉球処分の後である。それまでの王府役人としての専門的風水師が士族とともに失職し、仕方なく民間に入って家相や墓相を看るようになったためといわれている。

現代の沖縄では

- ・「屋敷」と書いて「ヤシチ」または「フンシー」と発音する地域がある。これは、沖縄では屋敷を造る際、方位や気の流れを見るための「羅盤」、風水の物差し「吉凶尺」、曆表などを用いて風水看(フンシーミー)・日選見(ヒューリミー)をする習わしがあるためである。“風水”を「売り」にした不動産や墓地の広告が見られるのも、風水の盛んな沖縄ならではである。
- ・沖縄の墓地風水・沖縄では、仏教や寺院制度が民間にほとんど普及しなかったため、墓に対する考え方が日本本土とかなり違う。墓地や葬儀は親戚一同の管理下におかれ、祖先崇拜(風水でいうところの「飲水思源」～水を飲むときその源に思いを馳せる。自分がどこから来たのか、どうしてそこにいるのかを意識する思想～に通ずる。)が代々強かった。また、墓づくりに関しても、墓の入り口や全体の寸法、入り口を向ける方向や墓を開ける日取りの決め方などに、風水の観念の強い影響を見る事ができる。

亀甲墓	1687年に福健省からもたらされたと言われ、今も沖縄のいたる所で見られる、いわゆる「亀甲墓」。これは、「円の形で天に至り、方の形で地に至る」という中国古来の宇宙観「天円地方説」によって造られたものである。つまり(墓の上部は)「円の形で天に至り」、(墓の下部は)「方の形で地に至る」ということだ。 また亀甲墓は女体を模した造りとよく言われるが、これは中国の陽宅(家の意。墓は陰宅。)造りの思想「家全体を一個の人体とみなし、家族を包みこむように造る」考え方と通ずるものがある。
 <p>「天円地方説」</p>	

窪 得忠「沖縄の風水」、渡邊欣雄「風水 気の景観地理学」より

～ 小浜島の風水 ～

1. 小浜島を風水で観る

島嶼を風水で見たとき、山地をもつ高島と、全体的に平らな低島では、集落モデルに大きな相違が見られる。小浜島は比較的平坦な地形ながらも、島のほぼ中央北寄りには標高99,4mの大岳(うふだき)を有するという、高島と低島の特徴を併せ持った地勢である。

小浜の集落を中心としてそこから海へと向かう道路は、そのほとんどがゆるやかな曲線を描いている。八重山の風水を記した「北木山風水記」(1862, 鄭良佐)によれば

「集落から海浜に直線で向かう道路は、悪い気が集落へと向かう通り道となるためよくない」とされ、小浜の集落から海に通ずる道路が曲がりくねっているのも、こうした考えに基づくものと推測できる。「これにはおそらく台風の際に、雨水の流路となるのを避けるという理由、目的があったのではないだろうか。」(目崎茂和 1998 「図説風水学」)

2. 小浜島の集落・宅地・墓地風水

(1) 小浜島の集落

・現在地における小浜の集落はいつ頃できたのだろうか。

沖縄の集落は、その形状から「水場や耕作地に応じ、ばらばらに形成された村。御嶽のもとに先駆者の本家があり、同心円状に分家が広がる自然村落」である「古村」と「18世紀以降に蔡温の風水に基づく村作りによって形成された計画的な碁盤型の集落。御嶽の配置も計画的になされ、聖域として保護した」、「新村」の二つに分類できる。

渡邊欣雄 「風水 気の景観地理学」目崎茂和 「図説 風水学」より

八重山諸島の集落は実にその70%が「新村」にあたり、小浜の集落も 整然とした碁盤型集落である 御嶽を中心とした集落ではない 風水的な要素が随所にみられる(以下で説明) 年代は未詳ながら、現在の位置に集落をまとめた人物は現在の小浜家の先祖である小浜目差加武多であることが小浜家の証文書からわかっている。(黒島精耕 2000 『小浜島の歴史と文化』より)等の事柄から、蔡温の地割制によって区画された「新村」であること、すなわち18世紀半ば以降の移動による集落であることが推測できる。なお黒島精耕氏は著書『小浜島の歴史と文化』のP48で「ゴバン型集落が蔡温の手によって行われたものであるとすれば、それと関連の深い、島の各屋敷内に古くから現存しているフク木の樹齢を推測することによって、およその(集落形成の)年代を推定することができるであろう。」と述べている。

・小浜島の集落にみることのできる風水的な要素

集落の位置・・・北には玄武にあたる大岳。地形はゆるやかに南に下って「晋土」と呼ばれる好風水地を成している。

集落の向き・・・「北木山風水記」によれば、海辺の平坦地にある村は、地勢より「坐艮向坤」(「ざこんこうしん」北東に背し南西を向く。日当たりと風向きのため)を重視せよ、とある。小浜島の集落もまた正確に東西南北を指しているわけではなく、やや北東から南西の軸に傾いており「坐艮向坤」の地形になっている

る。

集落の周囲の抱護林・・・小浜島の集落はそのほとんどが平坦な台地にあるが、これは風水でいうところの「漏洩之氣」(ろうせつのき)にあたり、良くない影響をおよぼすとされる。そのためこうした集落のほとんどではその周りに「抱護林」を設けて気の漏れを防いでおり、小浜集落の周囲にみられる林もこれにあたりと考えられる。こうした林や、村の御嶽の周辺の森は「腰当森(クサティムイ)」と呼ばれる。母なる大地が村という赤ん坊を包みこむ地形である。また、海岸の防風林、家を囲むフク木の生け垣なども抱護林と同じ「気の漏れを防ぐ」意味を持つとされ、これらは作物や家屋のいたみを防ぐという役割も担っている。

小浜集落のほとんどの家屋で見られるヒンプン、シーサーは、家の中に入ってくる風水上の悪い気＝「殺氣」を防ぐという思想に由来するものといわれている。また石敢當も「往還の行き当り(三叉路の突き当り)の住宅は、大いに凶」とする風水思想に由来するものであるが、整然と区画された碁盤目状の小浜集落では三叉路が非常に少ないため、あまりその姿を目にする機会はない。

* なお、細崎集落は20世紀以降に形成された新しい集落であるため、今回の調査の対象には含みません。

(2) 小浜集落の家屋

・家を建てる際に

小浜集落において家屋を建てる際には、その家の四つの角を、建造する年の干支の方角から“ずらす”ようにして建てる。つまり午年に家を造るならば午(南)の方角に家の角を向けるのを避けるという事である。それから、家屋の入り口は必ず南か東に向けて造る。また、敷地自体の吉方・凶方に関する話は、屋敷地がすでに区画されていて、敷地の中以外にこだわる事が出来ないためか、あまり聞くことができなかった。

沖縄本島でいうところの日選見のような暦判断(地慎祭、着工、落成などの日取り判断)は、小浜集落においては「大概は家主自身が暦をみて判断し、例外的に石垣の業者に任せることもある」とのことで、それらを判断する専門的な知識人や易者などは島にはいないようである。また、増築などの個人的な工事の際は、その仕事を依頼された建築業者が着工の暦を判断することもある。といっても本格的な暦表を用いたりするわけでは

なく、大安の日に着工する、落成は家主の誕生月を避ける、といった程度のものであるらしい。家相に関してもこれとほぼ同じことがいえる。

・敷地内にある石の神様

小浜集落の家屋の敷地内には、主に東側～南東にかけての隅に石の御神体が祀られている。実はこれと似たものが沖縄本島の主に南部に多く見られ、「フンシー(風水)」「フンシーガミ(風水神・屋敷神)」と称されて屋敷の北側から北東にかけて祀られている。また本島では御神体のない地域でも、旧暦2月、8月の屋敷浄化の儀礼の折や、屋敷完成の折には屋敷神を祀る風習がある。それを拝む日取り(旧暦1日、15日)も、祀る目的(家内安全・無病息災など、大体は台所のヒヌカンと同じ)も小浜のそれと共通しており、相違があるとすれば、本島では御獄から勧請した岩のかけらを祠に安置して祀るのに対し、小浜では元々その場所にあった石を御神体として祀り、それがどの家庭にもあるというものではないという点である。(渡邊欣雄 1994 「風水 気の景観地理学」を参照)

(3) 小浜島の墓地

- ・ 沖縄では「生きた人間は借家住まいもできるが、死人の借墓はできない。墓は永遠に住む家なのだから、家造りより墓造りが重要である。」という概念がある。同じような話を、小浜の集落でも聞くことができた。また「カーミヌクー(亀甲墓)は女性が股を開いて座っている姿を模したもの。死人は母胎へと回帰するのである。」という話も聞いた。沖縄で最初の亀甲墓がつくられたのは1687年、風水の伝来と同時期という史実から考えると、これは「地形や家屋、墓地を人体と見立てて、居心地のよい空間を作る」風水の思想の影響が強く見られる話と言える。

またおもしろいのは、通常の亀甲墓の上に本土風の直方形の墓が乗っている折衷様の墓が随所にみられたことである。これは小浜に客死した、あるいはやがてそうなるであろう内地出身者が、馴染みのない亀甲墓に入る不安と懐郷の念から造った墓だろうか？小浜集落には浄土真宗の寺院があり、その檀家の墓の可能性もあるのではとも考えたが、どうやら関連はないようである。

- ・ 「墓は家屋と同じく、後が高く前に下がる地形につくれば、ちょうど椅子に腰掛けるような形になり死者も居心地が良い。」という話を聞いた。これはすなわち前出の理想の風水地形「晋土」の表現であるといえる。実際小浜島内ほとんど全ての墓を地形図片手に見て回ったが、その全てが山地を背にし海に向かう、「腰掛け状の地形」(渡邊欣雄 1994 「風水 気の景観地理学」)に造られている。

- ・「墓地はすでに区画されているので、方位にこだわることはあまりしない。しかし墓を西枕に造ることは絶対にしない。西枕の墓は無縁仏の墓であるからだ。」という話を聞いた。事実、島内で見た墓の全ては北を背にして南に向いたものであり、この話を裏付けるものであった。墓地も家屋と同様の理想的地形をもつようである。

【謝辞】 最後になりましたが、今回の調査にあたり、小浜島のみなさんには大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

出典

- 窪 得忠 1990 「沖縄の風水」 平河出版社
- 黒島精耕 2000 「小浜島の歴史と文化」 黒島精耕
- 崎浜秀明 1984 「蔡温全集」 本邦書籍
- 田里友哲 1983 「論集 沖縄の集落研究」 離宇宙社
- 仲松弥秀 1968 「神と村」 琉球大学沖縄文化研究所
- 〃 1977 「古層の村」 沖縄タイムス社
- 町田宗博・都築晶子 1993 「風水の村序論『北木山風水記』について」
琉球大学法文学部紀要 史学地理学編三六号
- 三浦國雄 1988 「中国人のトポス」 平凡社
- 木崎甲子郎・目崎茂和 1984 「琉球の風土学」 築地書館
- 目崎茂和 1998 「図説 風水学」 東京書籍
- 〃 1985 「琉球弧をさぐる」 沖縄あき書房
- 山城 浩 1972 「小浜島誌・心のふるさと」 小浜島郷友
- 渡邊欣雄 1994 「風水 気の景観地理学」 人文書院
- 〃 1990 「風水思想と東アジア」 人文書院
- 何 暁昕 1995 「風水探源」 人文書院